

大学として何ができるか どこまでやるべきか



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

高橋 知音

「障がい」のとらえ方

- 身体や脳が、「多くの人」と同じようにうまく働かない状態になっている
- 本人の努力や治療で短期間にその状態が変わらない

機能障害

- 補助の道具などを使っても、「多くの人」向けに作られたものをうまく使えない状態

社会的障壁

高校での支援と大学での支援

特別支援教育と障害学生支援の違い

- 特別支援教育
 - 幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの。
- 障害学生支援(障害者の権利に関する条約)
 - 障害者が、差別なしに、かつ、他の者と平等に高等教育一般、職業訓練、成人教育及び生涯学習の機会を与えられることを確保する。このため、締約国は、合理的配慮が障害者に提供されることを確保する。

合理的配慮

「障害者権利条約」

「合理的配慮」とは、障害のある人が他の者との平等を基礎としてすべての人権及び基本的自由を享有し又は行使することを確保するための必要かつ適切な変更及び調整であって、特定の場合に必要なものであり、かつ、不釣り合いな又は過重な負担を課さないものをいう。

特別支援教育と障害学生支援の違い

- 学生本人が主体的な支援の利用者
- 平等な機会が与えられたら、学習するのは学生

大学ができること できないこと

- やらなければならないこと
- できること
- できないこと

大学がやらなければならないこと

- **学ぶ権利の保障**とそれを実現するための**合理的配慮**(「卒業させること」ではない)
 - 情報、学習環境へのアクセス
 - 成績評価における配慮
- 専門領域の学習支援
(チューター、ピアサポート、学習センター)
- 大学特有の環境への適応
(履修登録支援、大学での学習スキル)

配慮の条件

詳細な検査の結果、個人特性(認知機能)の弱さが、学業上の困難の原因として示されている

根拠はあ
るか？

単位取得に必要な学習が成立していることが確認できる

基準は
変えない

実施者にとって過度の負担とならない

「合理的」
と言えるか

診断がある

カウンセリングで目指してほしいこと

- 自己理解を深め自己決定を育てる
- 支援要請スキルの獲得

自己理解を深めるカウンセリング

- 認知機能の偏りの特徴、失敗が起きやすい状況、それを防ぐための工夫などを理解する
- **失敗から体験的に学ぶことも必要**
- **包括的なアセスメント**は有効
 - ただし、利用可能なツールは限られている
- <診断>
 - それがないと配慮が受けられない
 - 障害者枠での就労を目指す

スモールステップで 自己決定を育てる

1. 妥当な選択肢を二つにしぼって提示
 - どちらがよいか？
 - Aを選んだときBを選んだときの
「いいこと」、「悪いこと」を提示(図で、文字で)
2. 選択肢を提示してそれぞれの「いいこと」「悪いこと」を考えてみる
3. どんな選択肢があるか、考えてみる

支援要請スキル

- 中・長期的にはself-advocacy skills(支援要請スキル、自己権利擁護スキル)の獲得を支援
 - 自分の能力を発揮するためにどのような環境が必要かを理解してもらい、周囲に働きかけて自ら支援を引き出し、その環境を作っていく
- できれば大学内での支援の過程でこれが身につくようにしたい

事例:支援要請スキル習得のためのステップ

1. 配慮要請の場面に学生を同伴して、依頼の仕方を観察させる。
2. 個別面接の中で依頼の仕方をロールプレイで練習した上で、支援者同伴で教員を訪ねて学生が依頼する。
3. 支援者が教員に学生が依頼に行く旨を事前連絡し、学生一人で配慮要請に行かせる。
4. どのような依頼の仕方がよいかを学生に考えさせ、内容を支援者も確認した後、学生自ら教員にアポイントを取って配慮要請を行う。

すべての大学に求めるのは難しいこと

- 生活支援
 - 大学が生活全般を支援するのは困難
 - ↓
 - ボランティアの活用、ピアサポート
 - 地域資源の活用
 - 家族との連携
- ライフスキル訓練
 - 体系的な訓練プログラム

大学にはできないこと

- カリキュラムや特定の授業の本質的部分での変更、免除
 - アメリカの大学で、外国語を他の科目で置き換えるという配慮はある
- 過度な負担を伴う支援

まとめ

- 支援の基本は権利保障と合理的配慮
- 単位認定のハードルを下げないのが基本
- 学生の特性に応じた支援
- チームによる支援(コーディネーター役の重要性)

何をどのくらいやったらよいのか

- 発達による変化
- 環境からの要請の変化
- 支援のモニタリングが必要
- 時にはチャレンジが必要
- 不可欠な最低限の支援とは何かを常に考える